

---

# **神様と魔女の遊び時間**

秋人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様と魔女の遊び時間

### 【Zコード】

Z8903Y

### 【作者名】

秋人

### 【あらすじ】

つまらない日常が嫌いだけど目立たたくない

静かにしたい。という真田光秀に、ある日河川敷で会った、アーテネルトリーゼと契約を交わし、謎が多い中、魔女と戦うことになった。

命をかけたボードゲームで悪魔を倒し、普通の日常を取り戻せるのか？

## オープニング 始まりと終わりの予兆（前書き）

初めて書いてみました。

下手だと思いますが暖かい田で読んでください。

## オープニング 始まりと終わりの予兆

僕は、つまらない日常が嫌いだった。中学は何もおこなはずに卒業して高一になつたけど、どうしてもつまらないから、前から興味のあるマンガを描いて集英社に持ち込んでみたら「すごくいいよ。これ一人で描いたの？」と、信じられないほどに褒められ、気づいた時にはマンガを描く羽目になつていた。「神様ゲーム」というマンガを描いて、その一巻が売れに売れ大人気マンガになった。「ごめんなさい。本当にごめんなさい。もうペンなんて持ちたくないです。マンガを描く前まで一度も喋つたこともないクラスメイトからは、「サンガをくれ」とか「絵を描いて」など色々と騒がれた。もう目立ちたくない。静かにさせてくれ。と思い、世の中に五冊だけ本を残しペンを置いた。なのに「何でやめたの?」とまた騒がれ学校に行くのをやめた。家にいても親が「学校行きなさい」と文句を言われた。もう嫌だ。自分には居場所がない。死にたい。死にたい。死にたい。こんなことを思いながら高一になつた。キーンコンカーンコーン「やつと今日の授業が終わつたな。光秀」こいつは、神道 守。自分の数少ない友達だ。なぜか知らないけど一人でいる自分にしつこく話しかけて来て、知らないうちに友達になつっていた。「光秀」。喉が乾いた「ジューース買つてきて~」「自分を何だと思つてるんですか?」「ん~私の下僕?」「真顔で怖いこと言わないでくださいよ」この無駄にテンションの高い女は、歌夜 秋。中学の時からの友達で引きこもりになつっていた時も毎日家にしてくれた。秋のおかげで、家から出れたと言つてもいいくらいだ。「んじゃ、屋上に行つて弁当でも食べますか」「おっ、いいね~守くん」「何で、二人はそんなにテンションが高いんですか?あと、午後も授業ありますからね守さん」まあ、なんだかんだで疲れる毎日をおくつている。

「今度こそ終わったよな」

「はい、終わりましたね」「一緒に帰るづぜつ」「私も帰る~」

「何で～帰ろうよ～」この一人とこれ以上いると頭がおかしくなり

そうだ。「とにかく帰りますから、さよなら」帰り道疲れすぎて  
目の前がくらくらする。限界だ。雨も降ってきたし。橋の上で川を見ながら何時間こうしてるんだろう。あれ？こんな雨の中、河川敷でなにしてるんだろうあの子？見ると同学年くらいの子が今にも飛び込みそうなくらい、川に身を乗り出してる！「危ないだろ～」「君は僕のこと見えるんだね」透き通った目がすごい冷たい。でも何故か暖かい、人間ではないみたいだ。「僕はね、普通の人には見えないんだよ。名前はアテネ ハルトリーゼ。突然だけどパートナーになつて」「へ？」ダメだこの子完全におかしい子だ。「ほら、名前は？」「え、あつ、真田光秀・・・です」なんで敬語使つてるんだろう？というより、近づいてくるんですけど？足が動かない？

「んっ？」いきなり唇を奪われた？暖かい。ずっとこうしていたい。「はい、契約完了だよ。これからはずっと一緒に」「え、何？契約？自分が？」「そろそろ来るよ」「何が？」

「魔女が」その時、空が光つたと思つたら

黒い翼がついた綺麗なお姉さんが降ってきた

「やつと見つけたわよ。アテネ」誰？すごい、胸がかなり揺れいるんだけど。かなりエロい。「光秀。早くこの「ゴミ」を掃除してよ」

までまで、急展開でついて行けないんだけど

「ウエルスト」魔女が呟いた瞬間、時間が止まつた。しづくが落ちてくるはずなのに落ちてこない。「え？時間が止まつたの？もうどうなつてるんだよ～？」「ほら、光秀も唱えて」わけのわからないまま唱えてみた「ウエルスト」そしたら赤い線で四角い囲いができた「簡単に説明するよ。よく覚えてね。これから戦術的ボードゲームをするよ。ルールは簡単、あの「ゴミ」を倒せばいいの」「負けたら？」「死ぬに決まってるじゃないか」こいつ普通に危ないこと言いやがつた。「すべごべいつてると、殺しちゃうわよ。ぼうや」といき

なり魔女の兵隊が斬りかかってきた。「うわっ？」それを白い騎士がかばつた。斬られた騎士は青い光になつて消えてしまった。「光秀も念じれば騎士を動かせるから」自分は敵の兵隊一体を倒せと騎士に命令したら騎士一体が剣を振りかざした。相手は盾で受けたが盾が一刀両断されて兵隊も真つ二つにされた

「なんて強さなのっ」魔女はありえないという顔をしていた。「光秀。騎士の強さは光秀の欲の深さなんだ。だからこんなんで満足してないで相手を倒して」今、自分が欲深いつて言われなかつた？今は考へてる場合じやない

相手を倒さないと自分が殺られるんだ。「全軍突撃」一生に一回は言つてみたかつた。けど、まさか本当に言うことになるなんて「隊を組んで二人以上で戦いなさい」魔女も反撃に出る。さすがに二人だとキツいのか何体かは光になつた。「一回、退け。体制を立て直す」さて、どうするか。とにかく状況を整理しよう。「二十体いたのが十二体になつてしまつた。二体を自分のそばにおいて十体で勝とう」「よし、二体は自分の護衛をして残りは、固まつて背中を預けて戦つて」「囲んで袋叩きにしなさい」力が強い自分の騎士は袋叩きになりながらも相手の数を減らしてきてる。魔女はその戦いに集中している。いまならと思い、その戦つてる近くに行つて「今だ、奇襲をかける」そう言うと二体の騎士は外側から剣で一気につぎ倒した。不意をつかれた相手は体制を崩した。二体の騎士の方を向くと内側から斬られ、完全に混乱している

「ど、とにかく退いて」魔女が慌てていい。なんと、見ていて気持ちがいいんだろう。

相手の兵隊が十五体いたのに今は四体になつていい。壊滅寸前だな「囲んでじわじわ追い詰める。焦るなよ」じわじわと時間をかけて相手の兵隊が一体もいなくなつた。魔女を守るもののが何もなくなつた。「負けられない、こんなところで負けたくない。私が勝つんだ」気が狂つた魔女が騎士に向かつて突つ込んできた。騎士が剣を降つたがそれをかわし騎士を飛び越えた。「さすが魔女だな」と関

心していたら、じつに突つ込んでくる。その途中に闇の中から大きな鎌が出てきた。

「僕達も迎え討つよ。武器をイメージして、剣がいいな。剣をイメージして」アテネの言つ通りに大剣をイメージしてみた。そしたらアテネが光輝く大剣に変わった「光秀。私の力を貸してあげる」アテネの力のおかげで相手の動きが遅く見える。これなら自分でも戦える。剣をよく握ると剣から「あんつ」と何だか工口い声が聞こえてくる。まあ、それはさておき、魔女が突進して鎌を振り上げるのと同時に剣を魔女に突き刺した。血が飛びつちつて自分の服についているのも気にして、地面に倒れた。雨が降ってきて車の音が聞こえる。時間が流れ出したらしい。ということは、ゲームに勝つたということだ「光秀、大丈夫？よく頑張ったね」アテネか。立とうとしたがチカラが入らない。意識が薄れしていく。気がついた時には、次の日になっていた。眩しい日差しが射し込んで気持ちがいい。横を向くと何故かアテネが気持ち良く寝ていた。．．．寝ていた？何故だ？ここは自分の部屋だよな？確かに、昨日雨の中倒れて氣を失つて．．．どうした？「おはよ、光秀。今日は一人で休もう」「お前、どういうことだ？」「あの後、氣を失つて家まで運んであげたんだよ」「親によくばれなかつたな」「僕は神だよ。光秀の親戚になるくらい簡単だよ」「まさか、親の記憶を変えたのか」「うん、昨日からこの家で暮らすことになつたから。よろしくね」こうして光秀のゲーム生活が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8903y/>

---

神様と魔女の遊び時間

2011年11月26日20時49分発行